

山口瑛子『循環型社会のためのリサイクルの役割』

私たちの日常生活に馴染み深いペットボトル。ペットボトルの存在は私たちの生活のなかでもはや当たり前となりましたが、使用済みボトルを専用の容器に捨ててしまえば、その後どのように処理されているのか、普通はあまり気にしていないのではないのでしょうか。

ペットボトルは軽くて便利だし、使い捨てではなくリサイクルするのだから、どんどん使ってよい。そのような認識が私たちのなかにいつの間にか定着しているのかもしれない。しかし、リサイクルしさえすればそれで本当にいいのか、実態に即してもう一度良く考えてみる必要がありそうです。

この論文は、ペットボトルのリサイクルに焦点を当ててその実態と問題点を明らかにしています。

筆者がこの問題に関心をもったのは、愛地球博や大学祭を訪れた際にゴミの分別収集を見たことがきっかけでした。なにげなく見過ごしがちなことを敏感にキャッチし、自分の問題関心の芽を育てていったことは、たいへん大事なことだと思います。

また、筆者は大学祭を訪れてリサイクル活動の実態を調べたり、多摩清掃工場やビール工場を訪れて職員に話を聞いたりして、現場に学びながらリサイクル問題に対する意識を深めていきました。文献やインターネットだけでは知りえないことを、現場では数多く学べたのではないのでしょうか。本文中にも「実際に話を聞いてみて、今は資源化しているので焼却にまわるゴミが減ってきていることがわかった」(5ページ)とありますが、現場で学んだことが新たな問題意識へと発展していく機会にもなりうると思います。

ペットボトルのリサイクルについては、リサイクル品が売れずに滞留しているとか、リサイクルしているからといって飲料メーカーはペットボトルの販売個数を増やしているなど、以前より様々な問題点が指摘されてきました。

それらのなかでも筆者は、「リサイクルされないペットボトルの行方」に着目しました。リサイクルされないペットボトルは、その多くが中国・香港に輸出されるという「国際リサイクル」であるということ。また、2006年に改正された容器包装リサイクル法にも、事業者責任が明記されなかったこと。ペットボトルのリサイクルをめぐる、様々な問題点が明らかになりました。

筆者は最後に「リデュース、リユースを見直してみるべきである。これらの意識を大前提にして、リサイクルはそのあとの3番目にとるべき対策である」(19ページ)と述べていますが、実に重要な結論にたどり着いたと思います。筆者はこの論文を書く過程で、リサイクルに対する認識を大きく発展させたことが、最大の収穫であり、成功だったと言えますでしょう。